

世界の中の日本2013

堀内 修

2013年はワーグナーとヴェルディ、2人のオペラの巨人の生誕200年の記念の年に当たる。日本で優勢なのはヴェルディだった。やはりオペラの本場はイタリアであったと、少なからぬオペラ・ファンが感じたはず。かつてNHKイタリア歌劇団が人気をさらって以降、日本でイタリア・オペラ人気は定着し、常識になっていたのだが、2013年はその常識が再確認された年だった。ミラノ・スカラ座、ヴェネツィア・フェニーチェ歌劇場、トリノ王立歌劇場が相次いで日本公演を行った。

イタリアのオペラと歌劇場は、以前に比べて勢いを失っている。経済的な事情によるのだが、その背景にはオペラそのものに対する支持がゆらいでいるという問題もありそう。だからこそ、来日公演に意味があり、日本におけるイタリア・オペラとイタリアの歌劇場への賞賛が、イタリアのオペラへの応援につながるのではないかな。

ヨーロッパの一流歌劇場の日本公演は、すでに以前のような祝祭性を失ない、恒例行事になりつつあるが、それでも日本のオペラ活動の大きな一角を占めている。スカラ座やフェニーチェやトリノの劇場の公演は、少なくとも日本のオペラの関係者のための活動でなく、市民の文化的豊かさに貢献している。

■ ミラノ・スカラ座の《ファルスタッフ》と《リゴレット》

ムーティ後のスカラ座は、伝統と同時に、過去の公演とは大きく異なる面を見せた。上演されたのはヴェルディ《リゴレット》と

《ファルスタッフ》で、そのほかに演奏会形式による《アイダ》も上演されている。

演目は大変保守的だし、2つのオペラは演出の点でも現今の一流歌劇場に見られる挑発的現代性は見られなかった。新しいのは《ファルスタッフ》で、これはロバート・カーセンが演出し、すでにロンドンでも上演され、東京の後にはニューヨークのメトロポリタン・オペラで上演されたプロダクションだったが、秀逸な、そして広く受け入れられる舞台だった。《リゴレット》は以前のスカラ座日本公演でも紹介されたプロダクションで、ステファン・リスナー監督時代の公演としては意外な、いささか凡庸で古めかしい舞台だった。だが、2人の指揮者に、2013年のスカラ座が感じられる。《ファルスタッフ》をダニエル・ハーディングが、《リゴレット》と《アイダ》をグスターボ・ドゥダメルが指揮したからだ。どちらも若手に属する指揮者で、どちらもオペラで名を上げた指揮者ではない。賛否両論あったが、意欲的な公演であったのはまちがいない。

完成度が高かったのは《ファルスタッフ》だった。タイトル・ロールのアンプロジー・マエストリやアーチェのバルバラ・フリットリなど歌手陣は充実していて、日本のヴェルディの年を飾る、スカラ座の名に恥じない上演だったのではないだろうか。

だが幕のおりた後の熱気は《リゴレット》だったろう。最盛期を過ぎたとはいえ、リゴレットを歌ったレオ・ヌッチの日本での人気は絶大で、それが聴衆の反応にはっきりとあらわれていた。

■ フェニーチェ歌劇場の《オテロ》

消失の後に再建されたヴェネツィアのフェニーチェ歌劇場は、すでに1度来日公演を行ない、ゆかりの《椿姫》等を上演している。2013年の演目はひとつだけ、《オテロ》だった。この公演は大阪に完成した新しい大阪フェスティバルホールの開場記念として、まず大阪で行なわれ、その後名古屋と東京で上演されている。

この《オテロ》はスカラ座の《ファルス・スタッフ》に次いで、日本のヴェルディの年を飾る充実した上演だった。やはり指揮者チョン・ミョンフンの力が大きかった。フェニーチェ歌劇場の現在の実力の多くが、この指揮者によってもたらされていると確信してしまうくらい。確かにフェニーチェには、観光都市ヴェネツィアの伝統ある歌劇場として、いわば観光客の行くオペラ・ハウスとして活動しているのだが、一方では実力も備えているのがよくわかる。

オテロを歌ったグレゴリー・クンデは、いわゆるオテロ歌いではないが、現代のオテロとして十分にその責を果たしたというべきだろう。ヤーゴを歌ったルーチョ・ガッロとのコンビネーションもうまくいっていた。

■ トリノ王立歌劇場の《トスカ》と《仮面舞踏会》

ヴェルディの年のしめくくりとなったのが、トリノ王立歌劇場の《仮面舞踏会》だった。もうひとつ、プッチーニの《トスカ》も上演したのだが、こちらはタイトル・ロールに予定されていたソプラノが交替したこともあり、注目度は高くなかった。《仮面舞踏会》もラモン・ヴァルガスやオクサナ・ディカなど一流歌手が出演したものの、スター勢揃いというわけではない。それでも上演全体の質

は高く、日本のヴェルディの年をしめくくるにふさわしい上演となった。

全体的に低調なイタリアのオペラ界にあって、例外的に元気なのがトリノ王立歌劇場で、それは都市の経済的な豊かさが支えているのだが、同時に体制の問題でもある。音楽監督ジャンンドレア・ノセダの評価は高く、来日公演も、2つのオペラともノセダ自身が指揮している。オーケストラの力量も含め、ノセダがまとめた公演の総合的な力が、日本公演の成功と結びついたとみられる。だがここでも、スター歌手に支えられているイタリアのオペラが、過去のものになろうとしているのがわかった。

■ 松本の《こどもと魔法》など

新国立劇場の公演など、国内の出来事であるが、世界のオペラの動きの中に置いて見る見方が必要な上演がある。出演する歌手や指揮者や演出家を外国から招いている、という点からでなく、上演の質の高さからも、世界的な上演が行なわれているからだ。

サイトウ・キネン・フェスティバル松本でのラヴェル《こどもと魔法》はその典型的な例だろう。2本立てで、《スペインの時》も上演されたのだが、小澤征爾は《こどもと魔法》だけを指揮し、上演の質もこちらがとりわけ高かった。グラインドボーン音楽祭との共同制作で、演出の洗練や歌手の充実が、質の高さを生んだのはまちがいないが、小澤のこまやかな指揮もあって、これは世界的に見てもすぐれた上演になった。ヴェルディにもワーグナーにも、他のどんな記念にも関わりがなかったが、無論上演の質の高さは何より大切に決っている。

ワーグナーに関しては、思いのほか記念の年の華やかさを欠いたけれど、その中では神奈川県民ホール、びわ湖ホール、東京二期

会、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団が共同で制作した《ワルキューレ》が目立っていた。演出や歌手に何人か外国からのメンバーが加わっているから、というより、ワーグナーの質の高い上演が目ざされ、実現したという点で、この《ワルキューレ》はここに取り上げるべき上演だったのではないかな。

■ 2つのプラハとブダペスト

東欧の歌劇場による日本公演が、地方でのオペラ公演の大きな柱になっている事情は、2013年も続いている。1月に「プラハ国立劇場オペラ」が《フィガロの結婚》を浜松、名古屋、福岡などで16回上演した。6月にはハンガリー国立歌劇場が《椿姫》を横浜、川口、三重などで、やはり16回上演している。10月には「プラハ国立歌劇場」が《魔笛》を、新潟、長野、茨城などで、こちらは18回上演している。外国からの引越し公演としては、これらの東欧系オペラの上演回数が最も多いことになる。

プラハの歌劇場は、現在国立劇場としてまとめられているが、3つある劇場の内の2つが日本公演をしている。「国立劇場オペラ」とされているのは、《ドン・ジョヴァンニ》初演の劇場として知られるスタヴォフスケー劇場のアンサンブルで、「プラハ国立歌劇場」と称されているのは、プラハ・ドイツ劇場として創設され、一時はスメタナ劇場と呼ばれていた劇場だ。いずれもこれまでたびたび日本公演を行なっている。

この2つにブダペスト（ハンガリー国立歌劇場）を加えた3つは、どの歌劇場も《フィガロの結婚》《魔笛》《椿姫》と、大変ポピュラーなオペラを取り上げ、オペラにあまりなじみのない層に向けての公演を行ない、それがすでに10年以上も続けられている。その

間に上演の水準が変ってきているのが興味深い。かつては西側とはまったく違う、共産圏特有のいささか古めかしい上演だった。それがソ連崩壊後、ゆっくりと変り始めた。日本公演で、私たちはその変化を味わうことにもなった。観光地となったプラハやブダペストで、歌劇場が観光スポットの役目も果たしているのが、いまでははっきりわかる。オペラに慣れていない人も楽しめる上演は、そのまま日本各地での公演に合うのかもしれない。かつての古びた上演は、年を追うごとにドイツやフランスの都市の歌劇場の上演に近づいている。ウィーンやミラノなどの一流歌劇場とは違うランクのオペラが日本でも確実にその地歩を固めているのだろう。

プラハはどちらの公演もモーツァルト、それも特にポピュラーな2つを上演した。どちらもスター歌手が歌うわけではなく、指揮者や演出家も世界的な人たちではない。もちろん、そういう上演が、日本のある層の聴衆の好みに合致したということだ。

ブダペストの《椿姫》はまったく違う。確かにポピュラーな演目を選んでいるが、ヴェルディで、しかも日本で人気のあるソプラノ、エヴァ・メイとディミトラ・テトオドゥッシュウの2人をヴィオレッタ役に加えているからだ。どちらも世界の一流クラスの上演ではないものの、日本の多くの聴衆の好みに合わせた、ほどよい上演が実現されていたのではないかな。

■ 演奏会形式の《アイーダ》《フィデリオ》など

外国の歌劇場の引越し公演が行われるようになったばかりのころ、上演するオペラは4演目ほどが標準だった。現在ではそれが2演目になっている。2013年、スカラ座もトリノ王立歌劇場も2演目だった。さらに減る傾

向も見られる。フェニーチェ歌劇場も、ハンガリー国立歌劇場など東欧系の歌劇場も、上演したのは1演目だけだった。そのかわり、演奏会形式による上演を加えるのが目立っている。

ミラノ・スカラ座は、NHKが主催するNHK音楽祭の一環として、演奏会形式で《アイダ》を上演した。ドゥダメルが指揮し、ホイ・ヘーがアイダを歌ったこの上演は、舞台上演とは別の、音楽的な豪華さで、スカラ座の実力を感じさせることになった。

フェニーチェ歌劇場は、《オテロ》の舞台上演のほか、大阪で2つの特別コンサートを行なった。《椿姫》と《リゴレット》、いずれもフェニーチェ歌劇場ゆかりの演目で、どちらも抜粋だったが、チョン・ミョンファン指揮による演奏で、好評を博した。

4月に開かれている東京・春・音楽祭は、これまでも演奏会形式によるオペラの上演を行っていた。2013年はワーグナー・シリーズの第4回に当り、ワーグナー生誕200年の年にふさわしく、祝典的な《ニュルンベルクのマイスタージンガー》を上演した。フランクフルトの歌劇場で活躍するセバスティアン・ヴァイグレが指揮した上演は、重厚だが足取りは十分に軽快な、現代的ワーグナー上演となった。前評判が高かったクラウス・フロリアン・フォークトが歌うヴァルターも期待以上だった。ただ、ここまでくると舞台上演を求めたくなる気持ちも出てくる。保守層の、おかしな演出があるより演奏会形式がいい、という意見もわかるが、ワーグナーは本来舞台上演されるべきものなのだから。

舞台上演だったらと望みつつ、演奏会形式だからこそ実現できたと思えたのが、横浜みなとみらいホールで上演された、パーヴォ・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマー・フィルハーモニー管弦楽団による《フィデリオ》だった。レオノーレをエミリー・マギー、フロレスタ

ンをブルクハルト・フリッツが歌う、現在のドイツのトップ・メンバーによる上演だった。だがこの上演は、ただオペラをコンサート形式にするだけではなかった。プレーメン音楽祭、ボン・ベートーヴェン音楽祭との共同制作になる上演は、ロッコの語りを入れ、語りによってドラマが進行する形式になっていた。それが成功したかどうかは疑問だが、《フィデリオ》の、そして演奏会形式によるオペラ上演の、新しい試みが行われていたのはまちがいない。そしてヤルヴィ指揮による演奏の水準はとても高かった。

なお、みなとみらいでは1月にスロバキア国立オペラによる《メリー・ウィドウ》も上演されている。もちろんこれも演奏会形式だった。

■ バーゼル歌劇場《フィガロの結婚》

ヴェルディにもワーグナーにも関係なく、イタリア・オペラでもない。スイス、バーゼル歌劇場の日本公演は、ほかの引越し公演からは少々浮いた存在だった。だが、ドイツやスイス、フランスなどの最新のオペラ上演に関心がある人にとっては、この年の1番の楽しみではなかったろうか。時代を切り開く先端的オペラ上演は、まだまだ日本とは離れたところで起っている。ウィーン国立歌劇場やメトロポリタン・オペラ等の一流歌劇場とは別の、先端的上演を果敢に行なう歌劇場のひとつとして知られるバーゼル歌劇場の日本公演は、保守ではない日本のオペラ・ファンにとって、貴重な機会になったはずだ。

バーゼル歌劇場の《フィガロの結婚》は、ジュリアーノ・ベッタ指揮、エルマー・ゲールデン演出により、名古屋、富山、東京、滋賀で上演された。伯爵夫人のカルメラ・レミージョのほかは、中堅どころの歌手が歌っている。

申し分なく一流の上演、というわけではなかったかもしれないが、《フィガロの結婚》の洒落な味わいが出ていたのと、演出がやはり進んだところがあって、評判はよかった。筆者は事情があって聴けなかったのだけれど、それを残念だと感じさせるだけの評価で、バーゼル歌劇場の日本公演は、成果をあげた。

■ ライブビューイングとテレビ放映

メトロポリタン・オペラのライブビューイングは、年を追って客を増やしている。すっかり定着し、ファンを掴んだのではないか。

「ライブ」とはいえ、ニューヨークでの上演を同じ時間に上映するのではなく、収録した映像を、少し間を置いて映画館で上映する方式をとっている。時差があり、字幕を入れる都合もあって、これは当然のやり方だろう。ニューヨークでの最新の上演が楽しめる良さは十分にある。これまでメトロポリタン・オペラのような海外の一流歌劇場が日本公演を行なう際の、一番の問題点はその料金の高さだったのだが、その問題が当然ながら解消される。オペラの上演そのものではないにせよ、最新の上演の映像は見られる。

オペラのグローバル化という意味で、ライブビューイングは大きな意味を持つかもしれない。そして他に先んじて、大規模にメトロポリタン・オペラが取り組んでいるのも、オペラの覇権争いという点で、意味がありそうだ。劇場で聴く人の何十倍何百倍の、世界中の人が見るので、それがスタンダードになってゆく可能性は大いにある。2013-14年

のシーズンには、アンナ・ネトレプコがタチアーナを歌う《エフゲニー・オネーギン》など、注目の上演が日本の映画館で上映された。

メトロポリタン・オペラに続いて、ロンドンのロイヤル・オペラやパリ・オペラ座の公演の映画館での上映が行われるようになっていく。ライブビューイングはオペラを楽しむ新しいスタイルになってきつつある。

ライブビューイングよりずっと前に、オペラのテレビ放送は始まっている。改めて指摘するまでもないのだが、事情は少し変わってきている。テレビ受信機の画面が大きくなり、画質が向上したのも、オペラには重要だった。さらに衛星放送が増え、ケーブルテレビも一般化して、チャンネル数が増えた。かつてオペラといえばほぼNHKの放映だったが、その後衛星放送のWOWOWやCS及びケーブルテレビのクラシカ・ジャパンなどが積極的にオペラを放映するようになった。WOWOWによるメトロポリタン・オペラのシリーズや、NHK・BSの番組などによって、テレビでも世界で注目されているオペラ上演の多くが見られるようになった。これもオペラのグローバル化をうながす力になっていそう。

一方で世界の新しい上演にさまざまな方法で接することができるようになり、一方で日本独自の、少々保守的なオペラの趣味も強化される。それが2013年だった。スカラ座もトリノ王立歌劇場も、もちろんブダペストやプラハの歌劇場も、日本のオペラの聴衆の好みに合わせた上演を、多かれ少なかれ、行っている。